

Cherchez la femme!

—— 彼女は誰なのか? ——

橘 孝司

國立臺中科技大學應用日語系 助理教授

現代ギリシヤ語で最もよく使われる基本動詞の一つに *κάνω* がある。(1) のように、様々な目的語を取って「作る」の意味で、あるいは (2) のように「する」の意味で用いられる。

(1) *Κάνω έπιπλα / πίνακα / ρούχα / ούζο / καφεδάκι / σπίτι.*

「家具／絵／衣服／ウーズ／コーヒー／家を作る」

(2) *Κάνω εργασία / μαθήματα / έγκλημα / γάμο / περίπατο / ανακοίνωση / επίσκεψη
προσπάθεια / πρόταση / δάσκαλο / ποδήλατο.*

「労働／勉強／犯罪／結婚／散歩／公示／訪問／試み／提案／教師／自転車をする」(最後の *κάνω ποδήλατο* 「自転車をする(＝乗る)」は相当に口語的だが小説で使われているのを見かけた。一語で言えば *ποδηλατώ*)

また (3) のように、名詞の代わりに動詞を含む名詞節を取ることもできるし、(4) のように *να* 節が後続すると、「～しようとする(が実現しない・別の事態が生じる)」の意になる。

(3) *Θα κάνω ό,τι μου πεις.* 「言われたとおりにやるよ」

(4) *Έκανε να σταθεί.* 「彼は立ち上がろうとした」

さらに、*πως* 節や名詞を取って「～のふりをする」を意味することもある。

(5) *Έκανε πως δεν μας είδε / τρελό / άρρωστο.*

「彼は私たちを見なかった／狂人の／病人のふりをした」

使役文にもこの動詞を用い、人称代名詞弱形（アクセントを持たず直後の動詞と結合して発音される）と **να** 節とを組み合わせる。

(6) Πώς **να την κάνω** ν' αλλάξει γνώμη; 「どうすれば彼女の考えを変えさせられるか?」

(7) Πώς **θα την κάνω** να γυρίσει πίσω; 「どうすれば彼女に戻ってきてもらえるか?」

κάνω 自体が基本的な動詞であるのに加え、(6, 7) のような **την κάνω να** 「彼女に～させる／してもらう」もごく普通に用いられる構文である。そのためだろうか、小説を読んでいて似通った文に出遭ったものの、うまく解釈できずに戸惑ったことがある。例えば、次のような一節である。

(8) Μου έκανε πάλι νεύμα να **την κάνω**. Μπέκας, σ. 157

「(警部は) 彼女をしても・作ってもいいぞ、ともう一度私に目配せした」

警察署で警部と物語の語り手《私》が会話するシーンである。部屋にはこの二人の人物（いずれも男性）しかいない。いつの間に女性が部屋に入り込んだのだろうか。そもそもどの女性のことを指しているのか。あるいは直前の抽象名詞を受けているのだろうか（上の (2) に見られる通り、抽象名詞には女性名詞が多い）。しかし、直前の文脈を探してみるのだが、人間にせよ抽象概念にせよ、うまく当てはまる語が見当たらない。

別の例を挙げよう。ある女性の行方を追う勇敢な女性主人公ネフェリがチンピラを脅すシーンである。

(9) Η Νεφέλη επανέλαβε την ερώτησή της. Αυτή τη φορά δεν πρόλαβε να την ολοκληρώσει.

«**Την έκανε, την έκανε ...**»

«Πού είναι;» Η Νεφέλη πίεσε τη λάμα. Τα μάτια του είχαν δακρύσει.

«**Την έκανε, σου είπα. Πού να ξέρω;**» Σίμος, σ. 307

ネフェリは質問を繰り返した。今度は最後まで言い終わらぬうちに（チンピラは答えた）

「彼女をした、彼女をした」

「どこにいるの?」ネフェリはナイフの刃を押し付けた。男の眼には涙が浮かんでいる。

「彼女をしたって言っただろ。知らねえよ」

(9) の場合も、その場に居るのは女性ネフェリとチンピラ男だけであるが、後者の言う την「彼女」が誰を指すのかよく分からない。ネフェリが探している某女性なのだろうか。「彼女をした」とはどういうことか？ それに έκανε「した・作った」の主語は結局誰なのか（三人称単数だから、「私・あんた」で対話している二人ではありえない）。結局、全体の意味が何やら曖昧なままである。

そこで当然のように、την κάνω はもしかして慣用句ではないのかという疑問がわき、辞書に頼ることになる。

比較的新しく信頼できる辞書として現在流通しているのは、以下の①と②である。それぞれ、2064 頁と 1532 頁で、一巻ものとしては大部である。

①パビニオティス『現代ギリシャ語辞典』(Γ. Μπαμπινιώτης, 1998, *Λεξικό της νέας ελληνικής γλώσσας*)

②テサロニキ大学現代ギリシャ研究所『共通ギリシャ語辞典』(Ινστιτούτο Νεοελληνικών Σπουδών του Αριστοτελείου Πανεπιστημίου Θεσσαλονίκης, 1998, *Λεξικό της κοινής νεοελληνικής*) ちなみに、②はオンラインで無料公開されている。

https://www.greek-language.gr/greekLang/modern_greek/tools/lexica/triantafyllides/index.html

しかし、この二つには την κάνω の説明が特には見られなかった。

その後優れたこの二冊に加えて、③が出版された。1819 頁で①よりページ数は少ないながら、三段組の大型判で収録語数は引けを取らない。

③アテネ学士院『現代ギリシャ語有用辞典』(Ακαδημία Αθηνών, 2014, *Χρηστικό λεξικό της νεοελληνικής γλώσσας*)

この辞書の κάνω の項目で、以下の記述を見つけることができた。まさに求めていた説明である。

"την κάνω (νεαν. αργκό) φεύγω, αποχωρώ συνηθ. βιαστικά"

「την κάνω (新しい俗語) 去る、出発する (ふつうは急いで)」

そうすると την κάνω は俗語であり、かつ比較的新しい用法のようである。たしかに、(8, 9) は 2020 年、2019 年の作品だった（「引用資料」参照）。

さらに、以下のインターネットのページには、複数の無料オンライン辞書がまとめられており、新しい情報も入手可能で、非常に重宝する。

④ https://www.lexilogos.com/english/greek_modern_dictionary.htm

そのうちの一つ *Word Reference* には την κάνω に対して、英語 *bail, be off, beat it, blow, boogie* など多くの語が当てられている。いずれも「逃げる、立ち去る、サバる、ずらかる」などを意味する口語である。

そうである以上、警部も読者も苦勞して謎の女性（あるいは抽象名詞）を探す必要はなく、慣用句として以下のように訳せばいい。

(8a) 「（警部は）帰ってもいいぞ、ともう一度私に目配せした」

(9a) 「あいつ（＝ネフェリが探す女）、行っちゃった、行っちゃった」

「行っちゃったって言っただろ。知らねえよ」

このように、την と結合して慣用句化し、特別の意味を持つ動詞は他にもある。筆者が出くわして頭を悩ませた例を記しておく。

(10) Πρέπει να προλάβουμε να συλλάβουμε τη Σταθοπούλου πριν την κοπνήσει.

「（我々は）スタソプルが彼女を叩く前に逮捕しなければなるまい」

Μεταξά, σ. 143

(11) δεν γεννήθηκε ακόμη η γυναίκα που θα τη φέρει στον Μίλτο!

「この俺ミルトスに彼女を連れてくるような女はいない！」

Ράγκος, σ. 198&205

(12) είχε βαρεθεί να της την πέφτουν στον δρόμο

「（アルテミは）道で男たちが彼女に彼女をぶつけるのにうんざりしていた」

Μπέκας, σ. 391

(10, 11) を誤解しやすいのは、直前に女性名詞 τη Σταθοπούλου 「スタソプル（女性名）」、η γυναίκα 「女」が置かれているからである。την がそれぞれこの名詞を指すと考えてしまうと、それなら動詞 κοπνήσει 「叩く」、φέρει 「連れてくる」の主語はいったい誰なのか、となって訳が分からなくなる。την κοπνάω が「去る」、τη φέρνω が「馬鹿にする、コケにする」の慣用句だと分かれば、「（我々は）スタソプルが逃げだす前に逮捕しなければなるまい」「この俺ミルトスをコケにでできるような女はいない！」という風にすっきり解釈できる。なお (10) には την κάνω κοπάνα の言い方もあるらしい。

(12) では動詞 είχε βαρεθεί 「うんざりする」の主語は女性のアルテミである。ところが、その後に της την と続くと、「彼女に彼女を」とは女性がいっぱい何

人いるのやら混乱してしまう。しかし την πέφτουν が「つきまとう」の意であると突きとめられれば、της はアルテミ、主語は三人称複数なので不定の人々（この場合なら「道をうろつくジゴロたち」）となり、「（アルテミは）道で男たちに付きまといわれるのにうんざりしていた」のように筋が通る。

これ以外の την＋動詞の慣用句表現を以下にまとめておく。(του) のような括弧つき属格代名詞は、当該人物の性・数によって της, τους と変化する。例えば、του την δίνω「彼を苛立たせる」に対し、της την δίνω「彼女を苛立たせる」、μας την δίνει「わたしたちを苛立たせる」など。

1 την άρπαξα 風邪を引いた（女性名詞 γρίπη「風邪」を省略したのだろうか？）

2 την γλυτώνω 逃れる、助かる（関連表現として Φτηνά την γλύτωσα!「かすり傷で助かった！」）

3 τη σκαπουλάρω 逃れる、助かる

4 την κοπανάω こっそり逃げ出す

σε περίπτωση που θα του περνούσε απ' το μυαλό να την κοπανήσει

「相手が逃げ出そうという気になった場合に備えて」 Σίμος, σ. 116

5 (του) την δίνω（彼を）苛立たせる

6 (του) την σπάω（彼を）苛立たせる

ήθελε να μας τη σπάσει.「おれたちを苛立たせたがってる」 Μπέκας, σ.146

7 (μου) τη βάρεσε 頭に来る、（わたしを）苛立たせる

8 την γάμησα! しくじった!

9 την έβαψα! しくじった!

10 την έπαθα! 騙された! やられた!

11 την πάτησα! 騙された! やられた!

（次の表現から来ているのだろうか? πατάω την πεπονόφλουδα「メロンの皮を踏む＝人に誘われて失敗する」）

12 (του) την σκάω（彼を）騙す

（この動詞 σκάω「破裂する」はおもしろいことに、結合する代名詞によって意味を変える。το σκάω「逃げ去る」、τα σκάω「支払う」）

13 (του) την φέρνω（彼を）騙す、コケにする

Μας τη φέρανε!「俺たちを騙しやがった!」 Κακούρη, σ. 30

Μου τη φέρατε.「あんたたち、あたしをコケにしたね」 Σπυροπούλου, σ. 235

Κάποιος μου την είχε φέρει άσχημα.

「おれは誰かにとことんバカにされてたんだ」 Μπούρος, σ. 253

14 (του) την πέφτω (彼に) とびかかる。つきまとう

Δεν έχω ιδέα ποιοι μπορεί να του την έπεσαν 「誰が奴につきまとったのか、思いつかない」 Σίμος, σ. 117

15 την πληρώνω 罪をあがなう、借りを返す

Ελπίζω να μην έμπλεξες πουθενά και την πληρώνει το παιδί. Μπέκας, σ. 155

「お前さんが事件に咬んでて、息子が償うことになる、なんてことのないように頼むぜ」

16 (του) την στήνω (彼を) 待ち伏せする

μήπως κάποιος πρόλαβε να το σφυριξεί στους δημοσιογράφους και μας την έχουν στημένη. Μάρκαρης, σ. 425

「誰かが先回りして記者たちに吹聴し、私たちは待ち伏せされているのではないかと」 ((του) στήνω καρτέρι / ενέδρα の形もあり)

たった一音節ながらあの手この手で読者を惑わす人称代名詞 την「彼女」。しかし謎のファム・ファタールを探すよりも、信頼できる辞書に搜索を依頼するほうが解決は早そうだ。

引用資料

Κακούρη Αθηνά, <Φόνος στο κοτέτσι>, *Ελληνικά εγκλήματα* 3, 2009.

(アシナ・カクリ「鶏小屋の殺人」『ギリシャの犯罪 3』)

Μάρκαρης Πέτρος, *Ληξιπρόθεσμα δάνεια*, 2010.

(ペトロス・マルカリス『期限切れの負債』)

Μεταξά Ελευθερία, *Το χέρι του Θεού*, 2021. (エレフセリア・メタクサ『神の手』)

Μπέκας Βαγγέλης, *Ο γιος μας*, 2020. (ヴァンゲリス・ベカス『私たちの息子』)

Μπούρος Λευτέρης, *Το χέρι του νεκρού*, 2020. (レフテリス・ブロス『死者の手』)

Ράγκος Γιάννης, <Τανκς στην πύλη>, *Κλέφτες και αστυνόμοι*, 2013.

(ヤニス・ランゴス「門前の戦車」『泥棒と警官』)

Σίμος Δημήτρης, *Τα τοξικά μάτια*, 2019. (ディミトリス・シモス『毒の眼』)

Σπυροπούλου Χρύσα, <Ζητείται δολοφόνος>, *Κλέφτες και αστυνόμοι*, 2013.

(フリサ・スピロプル「殺し屋求めます」『泥棒と警官』)

本稿は日本ギリシア語ギリシア文学会 2022 年度冬期研究発表会 (2023 年 3 月 25 日) で発表した内容をまとめ直したものである。